

墨流し染において最も基本的な線模様の形成とその変化について物理・化学的見地より考察を行った。

演者は予報において、墨流し模様の分類を試み、線模様を細線及び太線模様の大別したが、線そのものの形態を分類すれば次の如くである。(名称は何れも演者の仮称)

A・滑線, B・鋭線, C・凝線, D・鋸歯状線, E・暈(ウン)線。

これ等各種の要素的な線の形成を検討した結果・Aは展開された流動性の墨線が基液の流動並びに撥膜などによって変形する際にのみ出現し、BはA状態の墨線が不規則な気流によって攪乱を受けた時に見られるものである。Cは墨線が展開された後、混在する金属イオンの影響を受けて半ば流動性を失った状態に至り出現するもので、本質的には放射状開裂効果を示す状態の墨膜と変わらない。Dは適度の粘度を有する或種の膠質溶液を基液として用いた場合に現れるが、その成因は撥膜に際しての墨線移動速度の不均一性に基くものと推定される。Eの成因は種々考えられるが、要するに浮遊墨線が沈降を示しはじめの際に見られるもので、多膠性の墨線や移動速度を大きくした宿墨線に出現し易い。

演者は更に、現在その技術の伝わっていない「等位相皺曲線模様」(仮称)の成因、ならびに基液の振動が墨線に与える影響に関しても若干の検討を試みた。